

瀬戸内海沿岸堆積物の花粉分析学的研究(広島県福山市)

○竹内徹(岡山理大・院・(株)フジタ地質) 三好教夫・北岡豪一・山口一裕(岡山理大・理)

広島県福山市引野町の沖積平野上で建築ボーリング調査時に採取された20.45mの試料を用いて花粉分析を行った。

試料は標準貫入試験用のサンプラーで1m毎に採取されており、試料の状態の良いものを選別して、28試料で分析を行った。分析の結果より、下記に示す4花粉帯に区分できた。

FH-1帯(1.20-2.50m)：マツ属・イネ科

FH-2帯(2.50-11.80m)：コナラ亜属・アカガシ亜属

FH-3帯(11.80-13.80m)：マツ属・コナラ亜属・ハンノキ属・イネ科・カヤツリグサ科

FH-4帯(13.80-20.45m)：マツ属・ツガ属・コナラ亜属・ハンノキ属・イネ科・カヤツリグサ科

花粉の出現状態からFH-4帯で針広混合林に草本類が繁茂する冷涼な時期であったと考えられ、三好(1994)の岡山市八浜においても最終氷期で同様の出現傾向が見られる。

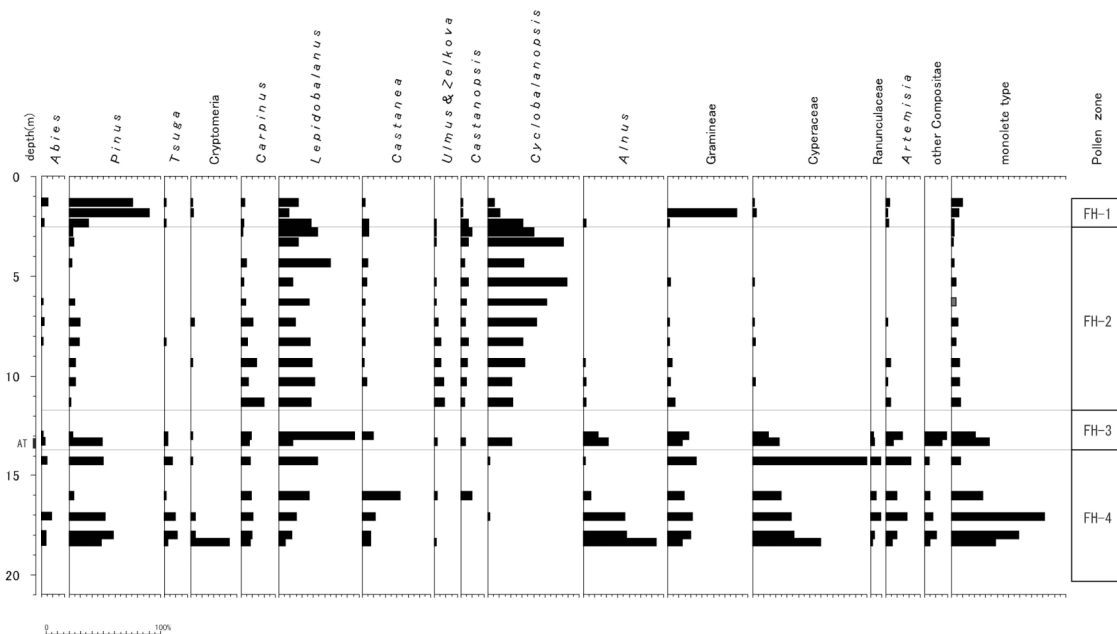
また、本試料では約13.2m付近で始良火山灰(AT)が確認されたことから、13.2m以浅が後氷期、以深が最終氷期後期に相当すると考えられる。

なお、堆積物の電気伝導度(EC)を測定した結果、火山灰層の上部ではECが高い値を示し、下部では低い結果が得られた。一般に電気伝導度は海成の堆積物では高く、陸成では低い値を示すことから、火山灰以深では氷期による海退で海水面が低下し調査地が陸地化していることを示している。

以上のことから本試料では最終氷期後期以降の植生変遷を示していると考えられる。

今回の分析結果より、最終氷期後期以降の植生変遷が明らかになった。調査地周辺は芦田川の後背湿地になり、調査地周辺では粘性土層と砂質土層の互層が約60m堆積していることがわかっている。

今後の分析によっては更に古い時代の植生変遷を明らかに出来るものと考えられる。



図：福山市引野町の花粉ダイヤグラム